

# 金沢学院大学・金沢学院短期大学

二〇二二（令和三）年度 入学者選抜試験問題

学校推薦型選抜〈一日目〉

二〇二〇年十一月二十一日（土）実施

## 国語（基礎学力）

### I 注意事項

解答用紙に「国語」と記入・マークしてから解答してください。

問題は1ページから8ページまであります。

問題は持ち帰ってもよいですが、コピーして配布・使用するのは法律で禁じられています。

### II 解答上の注意

解答は、解答用紙の解答欄にマークしてください。例えば、「解答番号は 10 」と表示のある問いに対して

④と解答する場合は、下記の例のように解答番号10の解答欄の④にマークしてください。

(例)

解答番号	解 答 欄
10	① ② ③ ● ⑤ ⑥ ⑦ ⑧ ⑨ ⑩



問題は次のページからです。

問1 次の(1)～(5)の傍線部の漢字表記として最も適当なものを、それぞれの語群①～⑤の中から一つずつ選べ。解答番号は  ～ 。

(1) 春のジンジイドウ。

- ① 異道                      ② 異同                      ③ 異働                      ④ 異動                      ⑤ 異導

(2) 雑誌をテイキコウドクする。

- ① 公読                      ② 講読                      ③ 考読                      ④ 高読                      ⑤ 購読

(3) タンテキに説明してください。

- ① 端的                      ② 短的                      ③ 单的                      ④ 嘆的                      ⑤ 淡的

(4) ハンメンキョウシと出会う。

- ① 半面                      ② 反面                      ③ 版面                      ④ 犯面                      ⑤ 範面

(5) チンツウな面持ちで見守る。

- ① 珍痛                      ② 鎮痛                      ③ 陳痛                      ④ 沈痛                      ⑤ 枕痛

問2 次の(6)～(10)のカタカナ語の意味として最も適当なものを、後の語群①～⑩の中から一つずつ選べ。解答番号は  ～ 。

(6) インフラ                      (7) キャパシテイ                      (8) テンプレート                      (9) ポートフォリオ                      (10) リサーチ

語群	①	②	③	④	⑤
⑥ 地殻	国際貿易港	調査	收容能力	物価上昇	社会基盤
⑦ 熟読			書類や作品をまとめたもの	地方都市	定型文・ひな型

問3 次の 11 ～ 20 の空欄に入れるのに最も適当な語を、後の語群①～⑧の中から一つずつ選べ。解答番号は 11 ～ 20。

(11) あんな 11 の首に鈴をつけるようなことは誰もやりたがらない。

(12) あの人は昔から 12 が合わないんだ。

(13) ほら、今泣いた 13 がもう笑った。

(14) ちよつとあなた、年齢の 14 を読みすぎじゃないの？

(15) 来年のことを言うと 15 が笑うよ。

(16) 彼、転職してから水を得た 16 のように元気になったね。

(17) 騒いでいた子どもたちが 17 の子を散らしたように逃げ去った。

(18) まったく、 18 も殺さないような顔をして、えげつないことをする。

(19) だまされたと知らされて、彼は 19 につままれたような顔で立ち尽くしていた。

(20) あの人はずべて他人任せの、張り子の 20 のような人だよ。

語群 ① 狐きつね ② 蜘蛛くも ③ 鳥からす ④ 魚 ⑤ 虎 ⑥ 馬 ⑦ 猫 ⑧ 鯖さば ⑨ 鬼 ⑩ 虫

問4 次の(21)～(25)の異名として最も適当なものを、後の語群①～⑧の中から一つずつ選べ。解答番号は 21 ～ 25。

(21) 満20歳 (22) 満40歳 (23) 満60歳 (24) 満88歳 (25) 満99歳

語群 ① 喜寿 ② 弱冠 ③ 白寿 ④ 還暦 ⑤ 卒寿 ⑥ 米寿 ⑦ 皇寿 ⑧ 不惑

問5 次の(26)～(30)の四字熟語について、誤りがあれば誤っている漢字の番号①～④を、(例)のようにマークせよ。誤りがなければ⑤をマークせよ。解答番号は  ～ 。

(例) 四面楚家<sup>①②③④</sup> ↓ 正しくは「四面楚歌」なので、④をマーク。

(26) 意気統合<sup>①②③④</sup>      (27) 衆人監視<sup>①②③④</sup>      (28) 無間地獄<sup>①②③④</sup>      (29) 間話休憩<sup>①②③④</sup>      (30) 時期尚早<sup>①②③④</sup>

問6 次の句のうち松尾芭蕉が詠んだものには①を、そうでないものには②をマークせよ。解答番号は  ～ 。

- (31) 五月雨の 降り残してや 光堂  
(32) 雀の子<sup>すずめ</sup> そのけそこのけ お馬が通る  
(33) 菜の花や 月は東に 日は西に  
(34) 古池や 蛙<sup>かはづ</sup>飛び込む 水の音  
(35) 草の戸も 住替る代ぞ 雛<sup>ひな</sup>の家

問7 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

道を歩いているときに、ふと道端の小さな花に目がとまることがあります。先日、目がとまった花は、真冬なのに咲き始めている仏の座ホトケノザの紅色の花と、はこべの白い花でした。私は田舎で百姓をしているので、ほとんどが見慣れた草で、ありふれた草です。それでも、時々「きれいだ」と感じる時があります。しかし、そこで立ち止まることもなく、そのまま通り過ぎていきます。そして、数分経つと、もう先ほどの目にとまった花のことなどすっかり忘れていきます。したがって「田んぼへの道を歩くのは楽しい。野の花に目がとまるから」などと思うこともなく、まして誰かに話すこともありません。

しかし、あらためてふりかえると、ふと目をとめていた草は、全部名前を知っている草ばかりです。目新しい名前を知らない草なら、むしろ立ち止まってよく見るはずです。「なぜ、ここに生えているのか」と問いつめたい感じがします。

ところで、いつも通るこの田舎道は果たして「自然」なのでしょうか。村の中にも田畑を耕す人がいなくなって、放棄された田畑が増えてきました。その横を通るときは「いやだな」と思います。無意識に目を背けてしまいます。しかし、その田んぼが藪やぶになった場所にも、草は生えていて、よく見ると道端と同じ草も混ざって咲いています。しかし、その藪の中の花には私のまなざしは向けられません。まなざしが向けられないところには自然はない、ということでしょうか。

若い頃には、都会の中にはちゃんとした自然はないと思っていました。たとえば悪いのですが、田舎の藪みたいな、それも貧相な自然しかないだろうと、正直思っていました。ところが友人から「都会にも自然はあります。街路樹の根元に咲く野の花はいいものですよ」と言われて、驚きました。それから、都会に行つて、街の中を歩くときは、道端の草に目をやるようになりました。田舎と同じ草もいっぱい生えています。

ですから、都会に住んでいる人も散歩のときや、通学・通勤の途中で、ふと道端の野の花に目をとめているのですね。そして名前を覚えてくるのでしょうか。もっとも、急いでいるときは、気づかないで通り過ぎてしまうのは、田舎でも都会でも同じです。自然とは、いったい何なのでしょう。自然とは、あたりまえにあふれています。自然は大切だ。自然は破壊してはいけない」と言うときの自然とはちがう自然が身の回りには、あたりまえにあふれています。

これが私たちの日常です。でもなぜ、私たちはふと野の花に目をとめるのでしょうか。なぜ、意識せずにまなざしを向けるのでしょうか（それもかなり個人差があります）。

「きれいだと思うから」という返事が聞こえてくるようですが、そうでしょうか。もっと深い理由がありそうです。

村に住んでいると、ある日突然に、蛙の鳴き声が村中に響き渡ります。六月上旬の夜のことです。百姓でない人は「夏が来たな」と感じるでしょう（私は「誰か田植えを始めたな」と思いますが）。蛙のほとんどは田んぼで産卵します。鳴いているのは雄の蛙で、求愛の声なのです。蛙は田んぼが産卵できる状態になるまで鳴かずに待っているのです（代掻きしろか・田植えが終わると、田んぼの水は温まり、干上がることがなくなり、餌の藻類が一斉に発生し、卵からお玉杓子オタマシヤクシが生まれ育つための条件が整うからです）。

しかし私たちは「代掻きと田植えが引き金になって、蛙が鳴き始めたんだな」と因果関係を意識することはなく、蛙が鳴き始めるのは毎年くり返される「自然な現象」であって、「いよいよ本格的な夏が来た」と蛙の鳴く声という自然に季節を感じるのです。

赤とんぼが急に飛び始めるのは、田植えして四五日過ぎた頃です。日本で生まれる赤とんぼのほとんどは田んぼで生まれます。しかし、赤とんぼが群れ飛ぶ夏空や秋空は「自然な現象」であって、この赤とんぼはどこで生まれたのだろうか、と考えることはありません。まして、田植えをして四五日過ぎたら、そろそろ赤とんぼが飛び始める頃だ、などと待ちかまえることもありません。近年、東日本では赤とんぼアキアカネが激減しています。「少なくなった」と気づく人もいますが、「なぜ少なくなったのだろうか」と考える人は、百姓にもあまりいません。

どうも身近な自然というのは、ことさらに意識して、移ろいの原因を突きとめようとするようなものではありません。自然に、あるがままでいいのです。夏の畑での百姓仕事は暑くて困ります。ところが田んぼでの仕事は涼しいのです。とくに稲の葉を揺らしてこちらに吹いてくる風に包まれると、ほんとうに身体の中を風が吹き抜けて行くような気がして、気持ちがいいものです。これは百姓なら実感として誰でも感じています。でも、なぜ田んぼの風は涼しいのか、と問うことはありません。「田んぼには水が溜たまっているからじゃないの」とは思うでしょうが、「ではなぜ、水が溜まっていると涼しいのか」と問われると、「冷たいイメージがするから、涼しい感じがする」と答える人が多いのですが、夏の田んぼは稲が繁さかっていて、水は見えます。

田んぼと畑の気温を調査した研究によると、その差は平均すると2・5℃ぐらいだったそうです。「へえー、そんなに違うのか」とは思いますが、「なぜそんなにまで差が出るのか」と考えることはありません。

晴れた日の夏の夕暮れともなると、田んぼの稲のすべての葉先に、水滴が現れます。それが夕日に反射してきらきら輝いている風景はまるで星空を眺めているのかと錯覚するぐらいで、見とれてしまいます。しかし、昼間はさらに多量の水分が葉先から蒸散しますが、すぐに空気中に消えていくので、人間の目には見えません。夕方になると空気が水分を抱え込むことができなくなり、水滴として葉先とびに留とどまってしまうから見えないのです。

しかし、私たち百姓も「そうか、この水滴が昼間は蒸発して、風を冷やしているのか」などと考えません。こうした科学的な説明は、涼しい風に身をま



かせている気持ちや稲の葉先の露を星空に見立てている感性を台なしにしてしまいます。無粋な、出過ぎた、無駄な説明だ、と感じるのです。このように私たちは四季折々の様々な自然に目をとめ、それを「自然な現象」として、満喫しています。生きものに目を向けることは気持ちのいいものです。しかし、その出現の原因を問い詰めたりはしません。そんな意識が持ち上がったら、自然は楽しむことができません。自然は、自然なままに感じて身を任せて、離れるとすぐに忘れていくものです。それがいいのではないのでしょうか。

(宇根豊『日本人にとって自然とはなにか』による。一部改変。)

(注) 代掻き——田に水を入れて土を砕き、かき混ぜて田の表面をならす作業。

問い 本文の内容に合致するものに①、合致しないものに②をマークせよ。解答番号は 

36
----

45
----

。

- (36) 筆者は、名前を知らない草には目をとめずに通り過ぎてしまうことが多い、と述べている。
- (37) 藪になってしまった田畑に生える草に筆者が目を向けないのは、放棄された田畑を見るのがいやだからである。
- (38) 放棄された田畑には自然は存在しない。
- (39) 都会の自然は貧相だ、と筆者は思っていた。
- (40) 筆者は「自然」には二種類の意味があると考えている。
- (41) 私たちがふと野の花に目を向けてしまうのは、「きれいだと思うからだ」と筆者は考えている。
- (42) 田植えをすることと蛙が鳴き始めることには関係がある。
- (43) 東日本で赤とんぼが激減しているのは、多くの畑が放棄されたからである。
- (44) 夏の夕暮れに稲の葉先に水滴が現れるのは、昼よりも多量の水分が蒸散しているからである。
- (45) 自然現象が起きる原因を追究すると、自然を楽しむことができなくなる、と筆者は考えている。

問8 枠の前後とつながるように後ろの①～⑧の文章を並べ替え、その3番目と6番目に位置するものの番号を答えよ。

解答番号は3番目⇐46、6番目⇐47。

生物は長いこと水中だけで暮らしていた。陸には住めなかったのである。その最大の原因は地球に降り注ぐ紫外線。陸上は紫外線が強く、DNAがそれにより切断されてしまい、生きてはいけなかった。水中ならその問題はない。水の層が紫外線を吸収してくれるからである。

生物が上陸可能になったのは成層圏にオゾン層が形成され、それが紫外線をかかなりの程度吸収してくれるようになってからのこと。これにはシアノバクテリアが関係している。彼らが登場して海中でさかんに光合成を行って酸素を放出した。その結果、海水中の酸素濃度が上がり、それにもない大気中の酸素濃度も上がってオゾン層が形成されたのである。

こうして生物が上陸できる条件が整ったのだが、上陸するにはまだまだ困難を解決する必要があった。最大の難題は水問題。生物の体は半分以上が水であり、水を失えば死ぬ。陸では水が手に入りにくく、また体から水が失われやすい。陸という環境は生物にとって、きわめて厳しい環境なのである。

まず植物が上陸した。植物のとった戦略は、地上という光が強く光合成に都合が良いが乾燥しやすい環境と、地中という乾燥しにくく湿っていて水を手に入れやすい環境の両者を同時に利用することだった。根を地中に伸ばして水を得、空中に枝葉を伸ばして光を受ける。地中はかなりの水を含んでいるため、植物は半分水中生活者だと言えないこともない。

植物を餌として節足動物(昆虫の仲間)が上陸した。そして昆虫を餌として四本足の脊椎動物(四足動物)が上陸した。四足動物には両生類・爬虫類・鳥類・哺乳類がいるが、最初に上陸したのが両生類。両生類から残りの三つの共通の祖先となった生物が進化し、その祖先から爬虫類と哺乳類が進化し、爬虫類の一部が鳥となった。

両生類(カエルやイモリの仲間)は、幼生は水中、親では陸と、水陸両方で生活するから両生類。両生類は陸の乾いた生活に適応しきれておらず、水から完全には離れられないのである。

小さいものほど体積の割には表面積が大きい。水は体の表面から逃げていくから、体が小さいとは、もっている水タンクが小さいのに逃げて行く水の量が多いことを意味し、干からびる危険が高い。小さいといえ、一生のうちで精子・卵・幼生は最も乾燥しやすい危険な時期なのである。だからこそ両生類はこの時期を水中で暮らし、ある程度の大きさに育って初めて陸に上がる。

爬虫類・鳥類・哺乳類の三つは陸だけで一生を送れるように工夫をこらした。交尾により精子を外気にさらすことなく雌の体内に送り込む。そして受精卵を外気にさらしても大丈夫な大きさになるまで丈夫な卵殻の中で育てたり、雌の体内で育てる。胚は卵殻内でも子宮内でも水(羊水)の詰まった袋(羊膜)

の中で育っていく(だから爬虫類・鳥類・哺乳類は有羊膜類としてまとめられている)。カエルや魚の卵よりヤモリや鳥の卵がずっと大きいのは、乾きにくい大ききまで卵殻内で育つ必要があるからである。

哺乳類はかなりの大きさになるまで母の胎内で育てる胎生という大変な作業を行う。大変さはそれで終わりではない。生まれた後も乳を与えてさらに大きくなるまで面倒をみる。陸上の食物(つまり生物)は小さな子には食べることが困難だからである。

陸上の生物は乾燥しないように体表を硬いもので覆っており、また重力に抗して姿勢を維持するための硬い骨格系や細胞壁を備えている。

愛という高尚な感情も、陸上生活への適応として理解できる。

ここでひとこと教訓を垂れるとね、そんなめんどうなことを両親がしてくれたおかげで君たちが存在しているのだから、これは感謝すべきことと思つていい。感謝する相手は当然両親であるが、また進化の歴史にも感謝していいのじゃないかしら。万が一自殺したいなどと思った時には、自殺という他の動物には思いもつかないきわめて高級なことを考えることのできる体につくってくれた進化に感謝すればいい。そこまで思い至れば、自殺よりもっと高級なことのできるのじゃないかと、さらに思いが他に移っていくんじゃないのかなあ。

(本川達雄『生きものとは何か 世界と自分を知るための生物学』による。一部改変。)

- ① だから親が乳を与えねばならないのである。
- ② 交尾は手数のかかる作業である。相手をみつけだし、合意を得なければならぬ。胎生も哺乳もはなはだ面倒。
- ③ 食べるにはこれらを噛み砕かなければならぬのだが、体の小さなうちは歯も顎もひ弱でそれができない。
- ④ それには長い腸が必要になるが、小さいうちは腸も長くない。結局、生まれたばかりの子は食べられるものがない。
- ⑤ そこでなんとか植物を噛み砕いて細胞にひびわれをつくり、その隙間から時間をかけて消化酵素をしみこませないと細胞の中身を食べられない。
- ⑥ 鳥の場合も、親が軟らかい餌をとってきたり、親が軟らかくした食物を与えて育てる。
- ⑦ そんな面倒なことをできるようにと、男女の愛や子への無償の愛が進化の過程で体に備わってきたのだろう。
- ⑧ とくに植物は細胞の一個一個が丈夫な細胞壁で包まれており、細胞壁をつくっているセルロースを消化する酵素を動物はもっていない。